本校の学力及び学習の状況
～令和6年度　全国学力・学習状況調査～

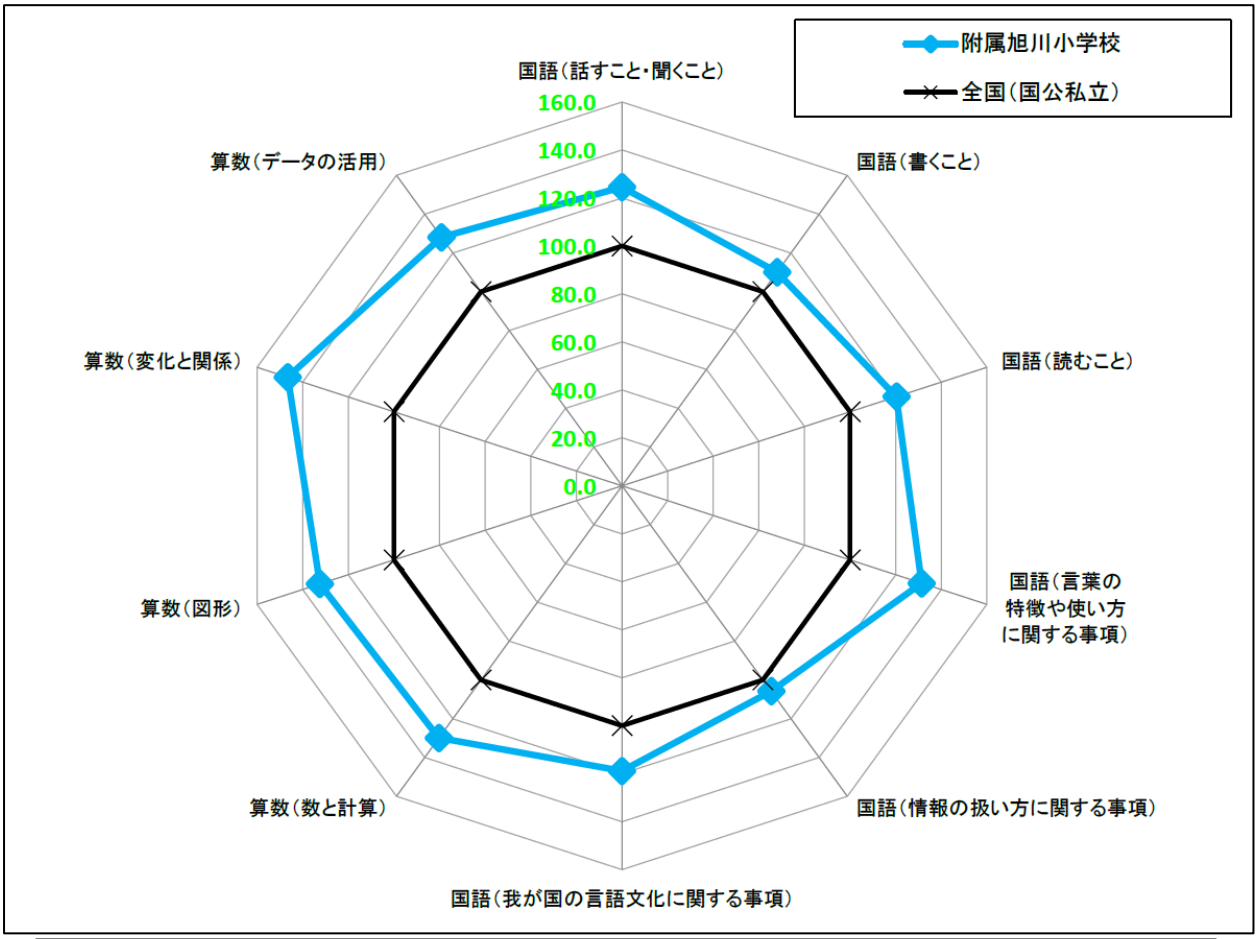
副校長　堀　　智 大

今年の4月18日（木）に，令和6年度全国学力・学習状況調査が実施され，本年度の調査結果が7月末に公表されました。

本調査は，全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し，国等の教育施策の成果と課題を検証し，その改善を図るとともに，学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てることなどをねらいとしています。

1．国語，算数及び理科の全国平均との差について

本調査は，第6学年を対象に，今年度は国語，算数の2教科で調査を実施しており，本校第6学年児童の調査結果の概要は次の通りです。



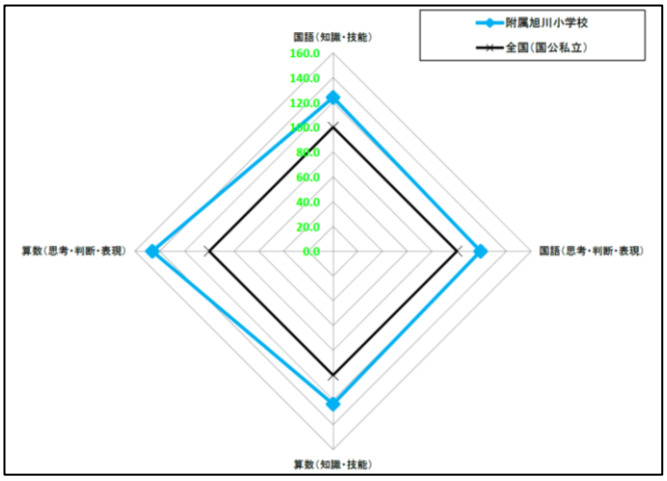
教科の領域別に全国を100とした場合の本校の状況をレーダーチャートで示したものです。
（本校の平均正答率÷全国の平均正答率×100で算出）

本調査により測定できるのは学力の特定の一部分であり，学校における教育活動の一側面です。例えば，「算数の計算は苦手だが，どのようにしたら問題を解決できるのか考えることは大好き」，「うまくできなくてもあきらめずに最後まで考え抜ける」というように，学力の別の面で秀でている児童の実態までは十分に把握できない場合があります。そのため，本校では，本調査と日頃の学習の状況を総合的に捉えて児童の学力を把握するよう留意しています。

【国語・算数の調査結果について】

全ての教科・領域で全国平均を大きく上回っていますが，特に，国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」，算数の「図形」，「変化と関係」は全国平均を100としたときに30ポイント以上回っています。

また，調査内容を，「知識・技能」，「思考・判断・表現」に分けて比較すると，本校の児童は，算数において，「思考・判断・表現」が高いことが分かります。



本校児童の「思考・判断・表現」が高いという傾向は，本校教員の授業づくりや，普段の児童の様子とも合致しており，児童の力が表れていた結果であったと捉えています。

例えば，算数では，折れ線グラフから必要な数値を読み取り，条件に当てはまることを言葉と数を用いて記述する問題があり，本校の平均正答率は全国を大きく上回っています。その問題は，桜が開花した月が3月だった回数と4月だった回数を年代ごとに表した折れ線グラフを読み取り，3月の回数と4月の回数の違いが最も大きい年代がいつで，その違いが何回かについて記述するものでした。グラフから必要なデータを読み取り，どのようなことが分かるのかを表現する力は，算数の時間に限らず，社会科や総合的な学習の時間等で生かされる力です。

また，国語の「思考・判断・表現」に関わっては，与えられた条件に沿って表現する力を見る問題があり，本校の平均正答率は全国を上回っています。その問題は，物語を読んで，心に残ったところとその理由をまとめて文を書く際，次の3つを満たすことが条件でした。その条件として，「① 心に残ったところと，その理由を書くこと」，「② 物語から言葉や文を取り上げて書くこと」「③ 60 字以上，100 字以内にまとめて書くこと」がありました。自分の考えを，必要な言葉や文を使い，端的に表現する力は，国語の時間に限らず，日常の様々な場面で必要な力です。

本校では，児童が上記のような力を身に付けるため，身に付けた知識・技能を活用しする場面や，他者に伝えたり，他者の考えを聞き自分の考えを見直したりする場面を意図的に設定しています。また，日常生活との関わりをもたせた学習展開をするなど，児童が自立した学習者として学ぶことができる教育課程の充実を図っています。

現在，本校では，「新たな価値を創り出す子供を目指した教育活動の創造～3年次：自ら学習を調整する子供を育てる，各教科・領域の学習づくり～」をテーマに研究を進めています。児童が主体的に問いを見いだし，探究する過程で，学習を追究し，各教科で求められる資質・能力を身に付けることができるよう，さらに教育課程の充実を図って参ります。

2. 学習状況について

本調査では，各教科の学力の他に，質問紙による調査も実施しており，学力に影響を及ぼすであろう様々な要因についての本校の実態を知ることができます。

質問内容	附小	全国
A.毎日，同じくらいの時刻に**寝て**いると回答した割合	42.4	39.7
B.毎日，同じくらいの時刻に**起きて**いると回答した割合	69.7	56.2
C.自分には，**よいところ**があると思うと回答した割合	62.1	43.4
D.先生は，あなたの**よいところを認めてくれている**と思うと回答した割合	71.2	48.8
E.**自分と違う意見について考える**のは楽しいと思うと回答した割合	51.5	30.5
F.学習の中で **ICT 機器を活用することで，自分のペースで理解しながら学習を進めることができる**と思うと回答した割合	66.7	33.9
G.学習の中で **ICT 機器を活用することで，友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる**と回答した割合	74.2	44.8
H.**地域や社会をよくするために何かしてみたい**と思うと回答した割合	60.6	36.9
I.**普段の生活の中で，幸せな気持ちになることがよくある**と回答した割合	56.1	50.8

※回答は，「当てはまる」の数値です。「どちらかといえば当てはまる」は含めていません。
（選択肢は，「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」）
※全国平均は，全国の国公私立の小学校の平均値の合計（%）です。

全67の質問の中から上記の内容を取り上げました。これらの項目は，すべて全国平均を超えていますが，超えている質問項目だから紹介したわけではありません。

本調査結果の分析については，国立教育政策研究所，各都道府県教育委員会，各市町村教育委員会がwebページなどで紹介しています。

国立教育政策研究所の分析では，ICT機器活用の効力感に関して肯定的に回答した児童生徒ほど，挑戦心・自己有用感・幸福感等に関して肯定的に回答していることが示されています。ICT機器活用の効力感とは，上記F・Gのようなことです。本校では，日常的に児童がICT機器を活用しています。学級全員で同じように使用する場合と，児童自身が，ICT機器を使用した方が効果的であると判断した際に使用する場合があります。上記FやGのような結果は，児童がICT機器の効果を理解し，使用目的を明確にもっていることの表れだと捉えております。

また，挑戦心・自己有用感・幸福感等は，上記Dのようなことです。特に，今年度は，全教職員が，学習活動等のねらいに対する評価を，即時的に児童に返すことを重点としております。

上記Cについては，児童が自分の内面について振り返ることができていること，友だち同士で認め合っていることの結果だと捉えております。

上記Hについては，社会科や生活科，総合的な学習の時間等で，地域社会との関連をもたせた学習活動を実施する中で，児童が身の回りのことを考えてきた結果だと捉えております。

上記Iについて，児童が自分の居場所を実感し，役割を果たすような教育活動を展開することで，安心感や充実感，幸福感につながると考えております。ちなみに「当てはまる」「どちらかといえば」当てはまると回答した児童を含めると，本校での平均は94.0，全国の平均は91.6でした。学校教育においては，日本社会に根ざしたウェルビーイングの実現が求められております。本校の児童が，幸せを感じながら生活することができるのは，保護者の皆様の支えがあるからこそであると考えております。今後もそのような児童であるためには，上記A，Bのような規則正しい生活が大切です。

保護者の皆様におかれましては，本校における全国学力・学習状況調査の分析が，規則正しい生活習慣の確立，お子様への肯定的な言葉掛け（努力を認め，結果を一緒に喜ぶ），親からの読み聞かせなど，お子様との日常的な関わり方について，今一度振り返っていただくきっかけになれば幸いです。